

Title	ユング＝シュティリングの『アーゼ＝ナイト』について：もう一つの「ヨセフ物語」
Author(s)	長谷川, 健一
Citation	ドイツ啓蒙主義研究. 2024, 21, p. 61-81
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/97827">https://doi.org/10.18910/97827</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## ユング＝シュティリングの『アーゼ＝ナイト』について

— もう一つの「ヨセフ物語」 —

長谷川 健一

### はじめに

『アーゼ＝ナイト．オリエントの話』Ase=Neitha. Eine orientalische Erzählung (1773)は、匿名の若手作家の処女作として、作家ヴィーラントが主宰する文芸誌『ドイツのメルクーール』の第3巻と第4巻に掲載された短篇である。冒頭には作者の友人ヤコービの推薦文が添えられていた<sup>1</sup>。ドイツ語読みの「アーゼ＝ナイト」を日本でなじみのある読み方にするならば「アセナト」となる。そのため、以下では作品名を『アセナト』と略記するが、同時代においても、通常は「Asenath」あるいは「Asenat」と表記されていたにもかかわらず、なぜ原題では「Ase」と「Neitha」に分けて綴られたのか<sup>2</sup>。この点は後ほど検討する。

『アセナト』のあらすじについては本論で述べるが、ここではまず、この短篇が旧約聖書〔創世記：37-50〕に登場する有名な「ヨセフ物語」を下敷きとしている点に注目しておきたい。「アセナト」はこのヨセフの妻となる女性の名前である。物語の大筋を簡単に記すと次のようになる。アブラハムの孫ヤコブの11番目の息子としてカナンの地に生まれたヨセフは、一人だけ「裾の長い晴れ着」<sup>3</sup>を着せてもらい、父の寵愛を一身に受けて育った。ヨセフには夢を解く特別な力があつたが、あるとき自分が見た不思議な夢の話をしたことで、腹違いの兄たちの怒りを買う。そして、兄弟たちに穴に投げ捨てられた挙句に商人に売り飛ばされ、奴隷としてエジプトへ連れて行かれる。そこでは、雇い主の奥方との関係を疑われ、濡れ衣を着せられて投獄されるという苦難に見舞われる。しかしその後、ファラオの夢を見事に解釈した功績により宰相として大抜擢され、エジプトを大飢饉の国難から救う。またこの間にファラオが妻合わせた神官の娘アセナトとの間に二人の子どもを授かり、兄弟間の確執も解消すると、父ヤコブとその一族をエジプトに呼び寄せ、やがてこの地で110歳の生涯を終える。創世記もこのヨセフの物語で幕が下りる。

上記の内容からも推察されるように、この物語を素材とした作品は、これまでその多くがヨセフを中心に描かれてきた。代表例としては、トーマス・マンの長編小説『ヨセフとその兄弟たち』<sup>4</sup>が挙げられる。あるいはまた、ミュージカル『ヨセフ・アンド・ザ・アメーzing・テクニカラー・ドリームコート』<sup>5</sup>や2019年公開のアニメ映画『ヨセフ物語～夢の力～』<sup>6</sup>でも同様の傾向が見られる。ところが興味深いことに、本稿で取り上げる作品では、アセナトの名前自体がタイトルになっているばかりか、内容においても、ヨセフと

同等の、あるいはそれ以上の存在感を持ってアセナトが描かれている。では、なぜそのように描かれたのだろうか。

後に判明した作者のユング＝シュティリング（1740-1817、以下ユングと略記）とは、18世紀後半から19世紀前半にかけて、キリスト教に関する著作を数多く発表し、同時代の信仰者に与えた影響力の大きさや、その敬虔な信仰姿勢から、晩年には「信仰覚醒運動の太祖」と呼ばれるに至った人物である。代表作『ヨーハン・ハインリヒ・シュティリングの生涯』<sup>7</sup>は、18世紀自伝文学研究の必須文献として、今なお関心を集めている。その一方で、処女作『アセナト』については、作品名への言及はあっても、作品分析の対象となることは、管見の限りこれまでほとんどなかった。この短篇にはしかし、極めて興味深い神認識が表れており、それは、1780年代後半に至るまでのユングの宗教性の特徴を考察する重要な手がかりになると考えられる。

唯一ともいべきデーデルトによる先行研究においては、この作品について「旧約聖書的な信仰が、エジプトの異教的な神話と汎神論的な宗教性に結びつき、自然や精神のうちにあまねく顕現する愛の神という理念に至っている」<sup>8</sup>と説明されている。しかしながら「異教的」「汎神論的」といった表現が含まれた信仰のあり方は、敬虔なキリスト教徒であったユングのイメージと俄かには結び付き難いものである。では、なぜそのような信仰のあり方が描かれたのか、それはユング自身の宗教性といかなる関係にあったのか。こうした点について、デーデルトの研究は十分な考察を加えていない。

本稿の目的は、『アセナト』に表れた信仰のあり方の分析を通じて、若きユングの信仰の根底にあった神認識の特徴を探ることにある。その際、タイトルに掲げられた「アセナト」の描写に着目することが考察の鍵となる。以下ではまず、作品分析の前提として、同時代のヨセフ物語の受容を確認する。次に、『アセナト』を複数の「聖書」における記述と比較しつつ、本作品の独自性について考える。そのうえで、複数の登場人物による「信仰をめぐる対話」の特徴を分析し、それが作者ユングの宗教性や問題意識とどのような関係にあったのかを考察する。こうした考察により、ユングがなぜ、キリスト教の特定の宗派の教えとの関連で語られたり、ピエティスト（敬虔主義者）と呼ばれたりすることを好まなかったのか、という従来の議論に別の角度から迫る手がかりも得られると考えている。

## 1. 18世紀における「ヨセフ物語」受容について

ヨセフ物語は、旧約聖書のなかでも比較的人気のある話であるが、18世紀のドイツ語圏において、文学の素材としてとくに注目を浴び、多くの作品が書かれていたわけではない。ユングはなぜヨセフ物語を題材に選んだのか。ここではユングとゲーテの関係に即して考えてみたい。

『詩と真実』には、少年時代のゲーテが聖書に強い関心を寄せていた様子が、かなりの

紙数を割いて描かれている。とくに興味深いのは、以下の一節である。

これらの家族の物語はやがてイスラエル民族の歴史のなかへ消えてゆくのであるが、とくに青年に大きな希望をあたえ、青年の空想力をまことに快くゆり動かしてくれるいま一人の人物が、最後にわれわれの前に現れてくる。それはとても情熱的な夫婦の愛の結実であるヨセフである。(中略) この素朴な物語はまことに美しい。ただ惜しむらくは、それはあまりに短い。そしてわれわれは、これをもっと詳細に描きだす責務があるように感じるのである。輪郭だけが描かれている聖書のなかのさまざまな人物や事件をこのように詳細に描きだすことは、ドイツ人にとってもはや珍しいことではなくなっていた。旧約聖書や新約聖書の人物たちがクロップシュトックによって、繊細で感情豊かな人物として描き出され、少年の私や同時代人の多くの人に訴えるところが多かった。(中略) ヨセフの物語を改作することは、すでに長いあいだ私の念願であった<sup>9</sup>。

ゲーテがヨセフ物語に特に強い関心を寄せていて、その作品化をも試みていたという興味深い事実に加えて、18世紀のドイツならではの背景として、代表作『救世主』で一世を風靡した詩人クロップシュトック(1724-1803)からの影響が挙げられている点は注目に値する。クロップシュトックは、旧約聖書のアダム、ダビデ、ソロモンそれぞれを主人公とした悲劇<sup>10</sup>を書いたが、「ヨセフ」を題材とした作品は残していない。少年ゲーテは実際にヨセフ物語を書いたようだが、それが残されていないだけに、アセナトがどのように描かれていたかを知る手立てはない。いずれにしても、ゲーテの9歳年上だったユングもまた、クロップシュトックから影響を受けた同時代人であった<sup>11</sup>。クロップシュトックの影響により、ユングもまた、ゲーテと同じように、旧約聖書の登場人物を描くことに関心を寄せていたとしても不思議ではない。

しかし、実際ユングに、創作活動に向かわせる「直接的な」きっかけ、さらにはヨセフ物語を題材とした作品を書かせる「間接的な」きっかけを与えたのは、やはり大学時代に知り合って親交を結んだゲーテだったと推察される。二人は、シュトラースブルクでの大学時代に、同じ文芸協会に出入りしていた。ユングは自伝小説のなかで、ゲーテとの交流から同時代の世界文学を学んだと記しているが<sup>12</sup>、まさにこの時代に芽生えた創作欲求がその後の作家人生の大きな原動力となったのである<sup>13</sup>。そもそもユングが書いた自伝小説に、少しだけ編集の手を加えて勝手に出版し、ユングを作家の道へと導いたのはゲーテであった<sup>14</sup>。

学生時代のユングは、ゲーテから、オシアン、シェイクスピア、フィールディング、スターンを教えられたと書いているが<sup>15</sup>、ヨセフ物語との関連では、フィールディング(1707-1754)、すなわち、イギリス小説の父と呼ばれ、18世紀ドイツの作家にも大きな影響を与えた人物の作品から、『ジョウゼフ・アンドルーズ』Joseph Andrews(1742)を挙げておきた

い。というのも、英語タイトルにある主人公「ジョウゼフ」の名前が、ヨセフ物語の「ヨセフ」を想起させる通り、この小説にはヨセフ物語のモチーフが巧みに組み込まれているからである。具体的には、ヨセフが奴隷として仕えた家の奥方が、若くて美しいヨセフを誘惑するが拒絶されるというエピソード、すなわち「女主人による誘惑」というモチーフのことである。

このようにゲーテの回想やフィールディングの事例は、同時代のドイツとイギリスにおけるヨセフ物語の文学的受容の一例にすぎないが、ここへさらに、音楽からの事例として、作曲家ヘンデルのオラトリオ『ヨセフとその兄弟』*Joseph and his Brethren* (1744)<sup>16</sup>を加えるならば、同時代の人々の間に、ヨセフ物語への一定の関心があったことが窺える。しかしながら、ヨセフの妻であるアセナトに注目が集まっていたわけではなかった<sup>17</sup>。こうした点を踏まえるならば、単独でタイトルに掲げるほどアセナトに焦点をあてたということ自体が、ユングによる「ヨセフ物語」受容の独自性を示していると言えるだろう。

## 2. 旧約聖書とユングの『アセナト』

一般にアセナトに注目が集まらなかった理由の一つは、旧約聖書における言及の少なさと関係していたと考えられる。まずはこの点を確認しておきたい。

### 2-1. 旧約聖書におけるアセナト

聖書でアセナトへの直接的な言及があるのは、実は以下に挙げる三箇所しかない。アセナトが言葉を発することは一度もなく、ヨセフとの馴れ初めが語られることもない。聖書の記述は基本的に簡潔であり、人物の内面描写も詳細には描かれないことが多いが、そうした点を差し引いて考えたとしても、アセナトという女性は、旧約聖書において、まったく目立たない、あるいは存在感の乏しい人物であると言わねばならない。具体的に見てみよう。

①ファラオは更に、ヨセフにツァフェナト・パネアという名を与え、オンの祭司ポティ・フェラの娘アセナトを妻として与えた。ヨセフの威光はこうして、エジプトの国にあまねく及んだ。[創世記：41, 45]

②飢饉の年がやって来る前に、ヨセフに二人の息子が生まれた。この子供を産んだのは、オンの祭司ポティ・フェラの娘アセナトである。[創世記：41, 50]

③ヨセフには、エジプトの国で息子が生まれた。それは、オンの祭司のポティ・フェラ

の娘アセナトが彼との間に産んだマナセとエフライムである。〔創世記：46, 20〕<sup>18</sup>

上掲の引用箇所にある通り、三つの事実、すなわち、アセナトがもともとエジプトのオン（ヘリオポリス）の祭司（神官）の娘であったこと、ファラオの命によりヨセフと結婚したこと、さらには二人の子（マナセとエフライム）を産んだことが示されているのみである。

## 2-2. ユングの『アセナト』のあらすじ

では、ユングは、これらの箇所を元に、どのような『アセナト』を書き上げたのか。あらすじは、以下の通りである。

メンフィスで仕える主人の命により、サイスにいる高名な大神官のもとへ旅をする奴隷のヨセフは、その途上で、同じくサイスに向かう一人の美しい少女アセナトに声をかける。サイスの神官の娘であるアセナトは、すぐに心を開く。というのも、ヨセフの顔が、以前に自分の夢に出てきたアトール神が連れていた若者にそっくりに思えたからであった。二人は、話を交わしながら次第に打ち解けてゆくが、サイスに到着すると、それぞれの目的を果たすため、いったん別れる。

サイスの大神官のもとに通されたヨセフは、来訪の目的について、自分が住むメンフィスでの神官同士の争い（プタス神とクネフ神のどちらが上か）を解決する助言を得るためである、と告げる。ヨセフがアブラハムの曾孫であることを知った大神官は、自分の父親がかつてアブラハムから、彼が信じる神の話を知ったこと、二人の交流の記念にサイス神殿の横にオベリスクを建てたことなどを話す。このやりとりを機に、ヨセフと大神官の間には信頼関係が芽生える。大神官はさらに、若い頃、ある異邦人の女性を暴漢から助けたこと、その女性と結婚したこと、その女性から真の神の叡知を知ったことを話す。話を終えた高齢の大神官は、妻が眠るピラミッドに目を遣り、やがて静かに息を引き取る。

サイスの町中に出たヨセフは、再びアセナトに出会う。アセナトは、大神官の死により、次は父親が大神官となること、自分はアトール神の女神官になることを告げる。進むべき人生が異なる二人は、別れに際して、お互いの神について語り合い、将来いっしょになることを誓う。ヨセフは、先代の大神官が建てたオベリスクをその誓いの印としようと提案する一方で、アセナトに大勢の求婚者が現れるのではないかと心配する。アセナトは、誰にも解けない謎かけをして断る、と言って彼を安心させようとするが、どういう謎かけをするかは教えない。ヨセフはアセナトと別れ、メンフィスに戻る。

女神官となったアセナトは、アトール神だけでなく、ヨセフの神についても人々に

教える。やがて、賢くて美しい女性に成長したアセナトは、たとえ求婚者が来ても「真実の愛のしるしとは何か」という問いに答えられなければ、その相手と結婚しないことを心に誓う。そこへ、二人の男性が、その謎解きに挑戦すべくやってくる。一人目は「愛する人のために死ぬること」と答えたが、それはアセナトの求めた答えではなかった。二人目の求婚者も謎を解けずに終わる。実は、二人目の求婚者の正体はファラオだった。ファラオの力を持ってすら、彼女の心を射止めることができなかったのである。

その後、ファラオを囲んで、アセナトと父の大神官らが食事をしていたとき、三人目の求婚者が現れる。この人物は「ネイト神殿の横に立つアブラハムのオベリスク」と答えた。この若者こそ、今や夢解きの功績によりファラオの宰相としてエジプトを治めていた、そして、若い時分にアセナトと将来を約束していた、あのヨセフであった。二人の再会の場に居合わせたファラオは、アセナトを妻としてヨセフに与えた。

### 2-3. 創作されたアセナト物語

以上のように、聖書の記述と『アセナト』のあらすじを比較すると、ユングは、旧約聖書に三箇所しかなかった記述の、さらに一部分だけを切り取り、二人の結婚には前史があったという前提で書いていることが分かる。彼はこの箇所を自由な想像力を駆使して膨らませ、二人が運命的に出会ってから結婚に至るまでを描き、いわば「新たな物語」を創作しているのである。

しかも、聖書と同じなのは、二人が結婚するという事実のみである。ヨセフがまだ奴隷の時分にサイスを訪れてアセナトに出会っていたというエピソードや、二人が以前から相思相愛の関係にあったというエピソードは、旧約聖書には存在しない。また、聖書に出て来ない架空の人物が何人も登場している。

本作品の最大のテーマの一つが愛であることは明らかである。たとえば二人は、信仰が異なり、身分差があるにもかかわらず、愛ゆえに、将来を誓い合う関係にいたる。アセナトによる婿選び、その際の謎かけも「真の愛とは何か」を問うものであった。加えて、1789年、この作品がイギリスで翻訳出版されたとき、その作品集のタイトルも *Sentimental Love* というように愛を前面に出したタイトルがつけられていた<sup>19</sup>。

ただし重要なのは、そうした二人の関係が、信仰をめぐる対話を通じて結ばれる展開になっていることである。この関連で注目しておきたいのは、出会いから結婚を誓い合う過程において二人がしばしば口にする「女神アトール」が、愛を象徴する神として描かれている点である。「アトール」は、通常は「ハトホル」<sup>20</sup>と呼ばれ、サイスやメンフィスなどの町で信仰された「愛の女神」であった。『アセナト』では、こうしたエジプトの神々の関係が、サイスの大神官によって次のように説明されている。

アトールは、根源的で永遠なる夜の女神だ。すべてはそこから生まれた。無限の精神であるクネフは、この夜の中に住んでいた。彼は大きな雲を作り、この雲からクネフとアトールを通して、男性神プタス<sup>21</sup>と女性神ネイトが生まれた。エジプト人はそのように教えている。プタスは、ネイトとともに世界を創造した。プタスは世界を支配し、それを維持する。ネイトは来るべき新しいものたちを生み出す。アトール神は、愛の神であるから、すべての繁殖を司り、促した。彼女は、純粋な悦楽と喜びの女神なのだ。(AN3:232)

### 3. もう一つのアセナト物語

ところで、ユングのアセナト物語は、どの程度ユング自身の創作によるものだったのか。また、彼はそのインスピレーションをどこから得たのか。この作品が、実際にユング独自の創作であったとしても、いま少し聖書との比較・検証をしておく必要があるだろう。

ユングが影響を受けた同時代の聖書として重要なのは、神秘主義的な解釈が施された聖書である。というのも、ユングは、父親の教育や、近隣にいた教会離脱的な信仰者たちとの交流を通じて、こうした聖書や関連する著作を読み、強い関心を寄せていたからである。そのうち、いわゆるラディカル敬虔主義者と呼ばれる人々の間で読まれていた重要なものは、ヨハン・フリードリヒ・ハウク（1660-1753）によるベルレブルク聖書<sup>22</sup>である。ユングもこの聖書が優れているとして賛辞を送っていた。また、静寂主義者マダム・ギュイヨン（1648-1717）による旧約聖書の注解書<sup>23</sup>も重要な文献となる。ハウクも、ベルレブルク聖書を書くにあたって、この著作を大いに参照し、引用していた。

しかしながら、どちらの著作を確認しても、ヨセフ物語の該当箇所〔創世記：41, 45〕に、アセナトについての特別な注解や解釈、補足的なエピソード、ユングの『アセナト』を想起させる逸話などは載っていないことが確認できる<sup>24</sup>。

#### 3-1. 偽典『ヨセフとアセナテ』

そこで今度は、18世紀を離れて時代を遡り、旧約聖書、ただし、旧約聖書の偽典に所収された、もう一つのアセナト物語に注目し、これとの比較を通じて、ユング版『アセナト』の特徴とその独自性についてさらに考えることにしたい。

もう一つのアセナト物語とは、一般に『ヨセフとアセナテ』（以下、偽典『アセナト』で統一）<sup>25</sup>と呼ばれる話のことで、紀元前または紀元後1世紀頃に成立した、すなわち新約聖書と同時代にエジプトにおいて成立したユダヤ教の文書である。邦訳の解説によれば、文学類型としては、「ギリシア・ラテン＝ロマン小説」に分類され、異教世界をユダヤ信仰に導くという宣教的な関心のもとで書かれた「ユダヤ教宣教文学」とされている<sup>26</sup>。



偽典『アセナト』には、ギリシア語のほかに、さまざまな言語による写本<sup>27</sup>が存在するが、邦訳があるのは、ギリシア語版とシリア語版<sup>28</sup>のみである。それぞれの内容は、大枠においては一致しているが、細部においては、種々の相違がみられる。ユング自身がこれを読んでいただかどうかは確認できないものの、かつてはドイツ語を含む多くの言語（英、仏、ノルウェー、アイスランド、チェコ、ポーランド、ロシア）に翻訳されるなど、世界文学に属した大ロマンであったが、近世に至っては忘却されてしまったという<sup>29</sup>。

ギリシア語版の偽典『アセナト』<sup>30</sup>は、大きく二つのエピソードから構成されている。一つは、アセナトがヨセフと出会った後、どのような経緯を経てユダヤ教に改宗し、結婚するに至ったかが語られる部分である。いま一つは、ヨセフとの結婚後、自分に横恋慕したファラオの長男によってあやうく誘拐されそうになりながら、その危機をどうやって乗り越えたかについて語られる部分である。

後半のエピソードは、旧約聖書のヨセフ物語を大きく逸脱し、もはや本来の物語に回収できない展開になってしまっている。また、ユング版では二人が結婚した後のことは語られないため、比較の対象として注目すべき箇所は、やはり前半部分になる。ヨセフもアセナトも絶世の美男美女として描かれており、とくに前半部分のアセナトは、ヨセフ以上の存在感を持って描かれており、注目に値する。

### 3-2. 類似点の検討

ユング版と偽典版の大きな類似として指摘しておきたい点は二つある。

一点目は、旧約聖書には描かれていなかったエピソード、すなわち、二人が出会い、結婚に至るまでの経緯が、具体的に描かれていることである。ただし、二人が出会う時期は異なっている。ユング版ではヨセフがまだ奴隷だった時期であるが、偽典版ではすでにファラオの側近として政治に携わっていた時期に設定されている。

類似点として特に注目したいのは、二点目である。それは、天使が現れることである。ユングの『アセナト』の場合はアトール神が連れていた若者として夢に現れ、偽典『アセナト』の場合は現実に現れる。夢か現実かの違いはあるが、どちらの天使の登場も、二人が結ばれる契機となっており、物語の展開の大きな動因という点で共通した役割を担っている。さらに興味深いのは、どちらの天使もヨセフに似た人物として描写されていることである。偽典では以下のように描かれている。

かの人は彼女をもう一度呼び、「アセナテよ、アセナテよ」と言った。（アセナテ）は、「はい、わたしです、ご主人様。あなたはどなた様か、私にお告げください」と答えた。かの人は答えた、「わたしは主の家の軍司令官であり、至高者の全軍勢の総大将です。両足で（しっかり）立ちなさい。そうすれば、わたしはあなたにお話ししましょう」。（アセナテは）目を上げて（その人を）見た。すると、なんとということであろう

か。着物といい、王冠といい、王笏といい、ヨセフと寸分違わぬ男が（立って）いた。ただ、顔だけは違っていて、稲妻のように見え、その目は太陽の光線のようにであり、頭の毛は燃える炎のようにであり、そして手足は火で（溶けた）鉄のようであった<sup>31</sup>。

ただし、偽典版の場合、ユング版の天使とは異なり、顔までヨセフに似ているわけではない。また、ユング版のように他の存在といっしょに現れるのではなく、単独で現れている点から見ても、類似した場面であるとは必ずしも言えない。ユングが、何らかのルートを通じて偽典版を読んでいた可能性は高いが、考えてみれば、天使によるお告げの場面が表れること自体は、聖書において珍しいことではない。

### 3-3. 相違点の検討

このように考えるならば、この二つのアセナト物語には、やはり相違点の方が多いと言わねばならない。また、こうした相違点こそが、ユング版の独自性をより際立たせているように思われる。ここでは二点だけ指摘しておきたい<sup>32</sup>。

一つ目の相違点は、アセナトの性格である。ユング版と偽典版とで、アセナトはまったくの別人に見える。偽典のアセナトの性格は、例えば、次の箇所から窺える。すなわち、両親にヨセフとの結婚を勧められたことに対し、アセナトが激しく抗議する場面である。

「なにゆえにわたしの主、わたしのお父様はそのようなことを言われるのでしょうか。そしてそのようなお言葉でわたしを囚われ人の如くに異人種の男に渡そうとお望みなのでしょう。あの追放せられ、奴隷に売られた男のもとなどに。お話しの男はカナンの地の牧人の子であり、その父に見捨てられた者ではありませんか。この男は主人の妻と床をともにし、（それがために）その主人は闇の獄に投げ入れられたのに、ファラオ様（がご覧）の夢を解き明かしてさしあげたために、獄から引き出しておやりになった者ではありませんか。いやです。わたしは王の長子に嫁ぎます。あのおかたこそ全地の王でいさせられるのですから」<sup>33</sup>。

ユング版においても「謎解き」失敗の結果として、アセナトがファラオからの求婚を断る場面はあった。しかし、ヨセフとの結婚を拒否する場面はなかった。ところが、偽典版では、ヨセフとの結婚の話をも激しく拒否し、かわりにファラオの長男との結婚を望む、しかも、きわめて気性の荒いアセナトが描かれている。彼女は、ヨセフが異邦人であること、出自が卑しいこと、身分が不釣り合いであること、などの問題点を、厳しい口調で次々と指摘する。その姿は、まさに「アセナト」の名前の本来の意味、すなわち「ネイト神に属するもの」そのものである。というのもネイトは戦いの神の属性を持つ神だからである<sup>34</sup>。

これに対してユング版のアセナトは、まだ奴隷だった頃のヨセフと出会い、意気投合す

るとすぐに恋に落ちた、素朴で可憐な少女であった。また、身分の相違は二人の関係の妨げにならないと言ってヨセフの背中を押したように、偽典版のアセナトと比べると、まさに別人であった。ユング版のアセナトには、戦争の女神ネイトの属性から来る荒々しさが、微塵も感じられない。

二つ目の相違点は、アセナトの悔い改め、すなわち、改宗の場面が描かれていることである。これは特に注目しておきたい点である。偽典版のアセナトは、ヨセフとの謁見を経た後に悔い改めを行うが、その際、これまで祈りを捧げてきたエジプトの神々を強い調子で完全に否定する。そればかりか、「無数にあった、金、銀の神々を手に取り、それらを細々に砕き、それを貧しい物乞いに投げ与えた」<sup>35</sup>とあるように、神々の像を破壊するのである。

ユダヤ教では、ヨセフが異教の神を崇める異邦人アセナトと結婚したという事実が問題視され、実は異邦人ではなかったという解釈もなされてきたように<sup>36</sup>、偽典版『アセナト』が受け入れられるためには、やはり、異邦人アセナトの徹底した悔い改めの場面が描かれる必要があったと推察される。すなわち、ユダヤ教にとってのアセナト物語は、改宗に重心が置かれた教訓説話でなければならなかったということになる。

こうした点に鑑みると、ユング版『アセナト』は、ユダヤ教の伝統にそぐわない、まったく異なる性質の物語になっていることが分かる。なぜなら、ユング版のアセナトは、改宗しないからである。以下、ヨセフとの別れの場面に注目して具体的に見ておきたい。

アトール神のお告げの夢を見て以来、ヨセフのことを「アトールの若者」と呼ぶアセナトは、ヨセフとの別れ際に「あなたの神について教えて。あなたの神は私の神でもあるわ。あなたの神にお仕えしようと思うの」(AN4:121)と述べる。これからアトールの女神官になるアセナトが、ヨセフの神に仕えるという申し出をするのは、まさに驚くべきことである。この申し出を受けたヨセフは、自らの神について次のように語る。

この花たちをお作りになったのは神なんだよ。花たちは、君と同じように成長し、花を咲かせる。あらゆるものの中に、生き生きとした精神が宿っていて、それが神の精神というものなんだ。君はいたるところで神を見つけることができる。そして、神は君に親しく語りかけているんだ。(AN4:121)

これを聞いたアセナトは、どのように神に答えたらいいのかとヨセフに問いかけ、それに対する彼の返答から、自分が信仰するアトール神とヨセフの神は、相容れないものではなく、むしろ重なり合っていることを感じ取る。次の引用にあるように、女神官となったあともアトール神を否定することなく、ヨセフの神と同じようにアトール神について教え続けたと書かれているのも、それゆえと考えられる。つまり、改宗はしていないのである。

アセナトは、娘たちをお供に選び、日々、この女神の秘密について教えた。同時に、

ヨセフの神についても語った。彼女の心は、すべての場所であらゆるものを生かしている愛の精神としてのアトール神を崇拝していた。(AN4:124)

続きをさらに引用してみたい。

したがって、彼女は娘たちを連れて茂みや野原や牧草地を通りながら、アトール神と一つになるように教えた。二羽の鳥が巣をかけている所に来ると、「こんなふうに鳥たちはアトール神を祝っているのです」と言った。ぶどうの蔓が木につたわっている所では「このように、草木はアトール神を祝っているのです」と言った。穏やかな風が吹いてきて、太陽の熱を冷やしてくれると、こう言った。「アトール神は穏やかな大気の中にいて、私たちが心地よくしてくれているのです」。6歳の男の子がひいおじいさんに抱きついて、白いひげを撫でているときには、こう言うのだった。「アトールの技をたたえなさい。アトールはすばらしいお方です。すべての被造物に良くしてください。たたえなさい、娘たちよ、すべての被造物とともにアトール神を」。(AN4:124)

この箇所では、アトール神への信仰が、かなり前面に出ているようにも見える。しかしながら、ヨセフのいう「神の精神」が「万物に宿る生き生きとした精神」であり、他方で、女神アトールが「すべての場所であらゆるものを生かしている愛の精神」であるとするならば、この二つの神は異なるものではなく、むしろ重なり合っているものである、と彼女が受け止めていたとしても不思議ではない。アセナトが、すべての被造物にアトール神とのつながりを見出し、それを賛美することは、ヨセフの神への信仰と決して矛盾しないのである。あるいは、自分に最も親しみのあるアトール神への賛美を通じて、ヨセフの神への信仰を表現している、と読むこともできるだろう。

以上の比較から明らかなように、偽典版のアセナトが、エジプトの神々を完全に否定し、訣別し、ヨセフの神への信仰に至ったのに対し、ユング版のアセナトには、そうした徹底的な悔い改め・改宗が見られない。アセナトは、ヨセフの神を受け入れる代償として、自らの神に対する信仰を捨てる必要性をまったく感じていない。したがって、神々の像を破壊することもない。また、お互いの神について語り合うことで、自分の神とヨセフの神が共生・共存し得ること、さらに言えば、両者の神がその本質において一致する、という認識に至っていたことが読み取れるのである。

ここまでの考察を踏まえるならば、ユングが「アセナト」の名前を「Ase=Neitha」と二語で綴っていた理由を推察できるだろう。「Asenath」ではなく、このように分かち書きにすることで、彼女の名前に異教の女神ネイトが含まれていることが明示される。これにより、ヨセフとアセナトが、それぞれが信仰する神または信仰の相違にもかかわらず、最後は結ばれる、という点を強調する意味があったと考えられるのである。

## 4. 信仰をめぐる対話の分析

本章では、本作品に描かれた信仰について、さらなる特徴を検討したい。ここで考察の鍵となるのは、サイスの大神官とヨセフとの対話である。ヨセフが大神官のもとを訪れたそもその理由は、地元メンフィスの神官たちの信仰をめぐる争いの解決策を得るためであった。また、前章で確認した、アセナトの信仰に影響を与えたヨセフの神認識が表れた発言は、この大神官との対話を経てより深まったことで発せられたものだったと考えられる。それゆえ、大神官との対話は、ヨセフの信仰だけでなく、アセナトの信仰にも影響を与えたと見てよいだろう。以下、二つのエピソードをとりあげて考察を進めることとする。

### 4-1. 大神官の父親とアブラハムのエピソード

まず、大神官が、自分の父親とアブラハムとの関係について述べた発言に注目したい。大神官は、はるばる訪ねてきたヨセフがカナン出身のヘブライ人で、ヤコブの息子だと聞くと、「偉大なアブラハムの一族か？」(AN3:230)と尋ね、自分の父親とアブラハムとの関係について、次のように語り始める。

「(…) 当時、私の父はプタスの最高位の神官の一人だった。彼はアブラハムと知り合いになり、彼から神について教わった。父は、ノアの一族がいかにして我々の国土をうちたて、神に対する真の礼拝をはじめたかを聞いた。その頃の神官たちは迷信深い者たちだった。彼らはアブラハムを憎み、私の父を迫害した。父はついにこのサイスに移ってきて、ネイトの大神官になった。アブラハムの思い出のために、大きなオベリスクを神殿の隣に立てた。そしてそのオベリスクに、神への真の礼拝について刻ませたのだ。(…)」(AN3:230)

ここで述べられている事実とはつまり、大神官の父親にとっては、エジプトのネイト神への信仰と、アブラハムの語った神への信仰が、決して矛盾するものではなかった、ということになるだろう。大神官の父親は、他の神官からの迫害を受けながらも、エジプトの多神教とアブラハムの教える一神教の神とが、共存・共生しうることを確信した。だからこそ、そのことを、オベリスクの建設によって示したと考えられるのである。後にこのオベリスクが、神認識が一致したヨセフとアセナトの愛のしるしとされたのも、それゆえと考えられる。

### 4-2. サイスの大神官とその妻のエピソード

次に、若き日の大神官と、後にその妻となる女性との対話に注目したい。

若き大神官は、まだチュザス<sup>37</sup>のアトール神殿で修業をしていたときに、この女性と出会う。その際に彼は、彼女の顔に天上的な穏やかさとネイト神の存在が刻印されているように感じたという（AN3:234）。この描写には、両者が共通の神認識に至る可能性が示唆されていると考えられる。

一方で彼女の方は、自分を暴漢から救ってくれた若き日の大神官を、最初は天使だと考えていた（AN3:234）。天使の存在を知っていることから、この女性は、ヨセフと同じ神を信仰していたと推察される。また、自分はイシュマエル人だと述べている（AN3:234）ことから、アブラハムの息子で、アラブ人の祖とされるイシュマエルの血を引いていることも分かる。若き大神官は、この女性から神についての高次の理解を得る。それは、彼女が父から得たという「真の神についての叡知」であり、彼女が天使のような若者から聞いたという「神性や知恵や徳」であった（AN3:235）。

大神官はこの対話のなかで、エジプトにおける神理解について説明する。それによれば、エジプトでは、真の神はクネフのみ、その他の神々は、この唯一神のさまざまな側面に過ぎない。しかし、民衆にはそれが理解できないため、個々の神々を崇拝しているのだという（AN3:236）。このくだりには、エジプトの宗教が、いわば一神教と多神教を並存させ得る二重構造にあったという理解が窺える。これは 18 世紀ドイツ語圏の知識人の間で知られていたエジプトの宗教観であった<sup>38</sup>。

多くの神々は唯一神のさまざまな現れに過ぎないという認識からは、さらに興味深い思想が導き出される。それは、この話に登場する三つの神、すなわち、女神アトールも、女神ネイトも、男神プタスも、すべては唯一神クネフのさまざまな性質を表した神であり、すべては一つの神であるという理解、つまり「全にして一」「一にして全」という「ヘン・カイ・パン」という思想である。これについては、後ほどまた取り上げることにしたい。

さて、若き大神官によるこうした神理解に対して、イシュマエル人の女性は、神は本来認識できないものであること、そして、人間のわがが誤った神の理解につながっているということを述べ、さらに次のように話す。

あなたがアトール神に祈る場合は、アトール神のかわりに、天地の真なる神に呼びかけなさい、そうすれば足りないものはないとはっきり感じるでしょう。あなたは、次第に、魂のなかに今までに感じたことのないような安らぎを見出すでしょう。草原の花や木々すべてにおいて、神がそばにおられることを感じるでしょう。どんな被造物のなかにも、神は新たな姿で現れてくれるでしょう。それぞれの被造物のうちに、神の存在を新たに感じ取れるでしょう。（AN3:236）

この箇所では注意すべき点は、この女性がアトール神への祈りを否定しているわけではないということである。むしろ、エジプトでアトール神の形で表された神への祈りを、それが本来表していたはずの神、彼女の表現を借りるならば、「天地の真なる神」、すなわち「祈

りをささげるべき本来の対象」そのものに向かうよう促しているのである。

若き日の大神官は、彼女のこの言葉に共鳴し、感銘を受ける。その理由は、彼自身によるエジプトの神々についての説明から推察できるだろう。すなわち彼によれば、アトール神を含むエジプトの多くの神々は、そもそも唯一神クネフのさまざまな性質を表したものに過ぎない。また、クネフは「無限の精神」を表す神であったが、「クネフ」という名前自体は、民衆の理解を助けるための便宜上の呼び名に過ぎなかったという。ここでいう「クネフ」とは、ローマの歴史家プルタルコスが記しているところの「クネフ」、すなわち「隠れたる神」を意味するエジプトの最高神「アメン」の化身であると考えられる<sup>39</sup>。それゆえに大神官は、彼女との対話を通じて、いわばエジプトにおける「真の神（隠れたる神）」としてのクネフと、彼女の言う「認識できない神」とが、本来は重なり合うものであり、根底において一致しているとの理解に至ったと考えられるのである。

大神官は、この対話の直後に、彼女に結婚を申し込む。ヨセフとアセナトと同じように、この二人もまた、信仰を通じた愛によって結ばれるのである。

#### 4-3. 「真の神」とは

ところで、ここでいう「真の神」とは、結局のところ、アブラハムやヨセフの神、つまりは、ユダヤ教的な神かといえ、そうでないように思われる。たしかに、ユダヤ教もキリスト教も、共通の唯一神を信仰する宗教ではあるが、ユング版『アセナト』の根底にある神理解は、旧約聖書の「出エジプト」に描かれるモーセの登場以降、民族宗教的な色彩を強めたユダヤ教的なものというよりは、むしろ、「愛の宗教」としてのキリスト教的なものに近いと考えられるからである。作者のユングが、公的にはカルヴァン派の信徒であったことを考えると、そのように考えるのが自然ではないだろうか。

ただし『アセナト』の舞台は、イエス・キリストが現れるよりもはるかに昔の時代である。また、作品のなかでは、アブラハムとヨセフの信仰が、時代をさらに遡ったノアの信仰に連なると強調されていることから、歴史的・制度的なキリスト教との関係が薄められているような印象も受ける。

他方でこの作品は、エジプトの多神教を否定しているわけではなかった。多神教が否定されるのであれば、偽典版『アセナト』のように、改宗するアセナトの姿が描かれなければならなかったはずである。また、ユングの『アセナト』において、多神教の根源には一神教があり、異なる宗教や信仰も、根源的な神において一致する、という認識が読み取れた点も看過できない。さらに踏み込んで言うならば、ユングが、旧約聖書の「出エジプト」以降の物語ではなく、「創世記」のヨセフ物語に着目した理由も、この物語がこうした認識の表明を許容する題材としてふさわしいと判断したからではないかとすら思われる。

これらの考察を踏まえるならば、特定の信仰の神と、それ以外の神々との相違を強調するのはではなく、「真の神」は宗教を超えて一致しうること、信仰の相違は愛において克服さ

れ、どの宗教も共存・共生しうることを示そうとした点に、作者のユングのメッセージの重心が置かれていると考えられる。少なくとも、特定の宗教や宗派、あるいは特定の神以外を排除することは、ユングの本意ではなかったはずである。

#### 4-4. 「汎神論的な」神認識について

「真の神」に関しては、いま一つ検討しておきたいことがある。それは、「はじめに」でも触れたように、本作品に描かれた信仰に「汎神論的な」要素が結びついているという指摘のことである。この指摘をした研究者のデーデルト自身は、なぜそのように判断できるかについて、具体的に論じていなかった。もっとも、たしかに本作品に描かれた神認識には「汎神論的な」要素が表れているようには見える。しかしそれは、本当に「汎神論的」と呼べるものであるのか、もしそうであるとしたら、それはどういう性格のものであったのか。この問題は稿を改めて検討することになるが、本稿ではその手がかりとなる道筋を示しておきたい<sup>40</sup>。

まず、第3章第3節で取り上げたヨセフとアセナトの対話を思い起こしてみたい。ヨセフによれば、神は、自然をはじめとするあらゆる被造物のなかに宿る生き生きとした精神であり、人々はいたるところで神を見出し、神は人々に親しく語りかけるという（AN4:121 u. 124）。こうした発言に表れているのは、自然のなかに顕現し、遍在する神という認識に近いものである。神は人格をもち、人々と日々親しく交わる神として捉えられている。それゆえ「汎神論的」とは形容し難いものである。こうした「遍在する神」という認識は、ユングの自伝小説にも見出される。例えば、まだ仕立て屋の徒弟をしていた頃のユングが、敬虔な親方と一緒に森を歩いていたとき、「万物の父にして、そばにおられる善なる神を、自然の至るところに見て感じ取った」<sup>41</sup>という。

一方、第4章第2節で取り上げたサイスの大神官とイシュマエル人の女性の対話にも、自然における「神の遍在」という認識がはっきりと窺える発言があった。それは、イシュマエル人の女性の口から出たものであった。彼女によれば、神に祈りをささげるとき、人々は草原の花や木々すべてにおいて、神がそばにいることを感じる。神はどんな被造物のなかにも新たな姿で現れ、人々は被造物のうちに神の存在を新たに感じ取るという（AN3:236）。これは、被造物そのものが神とみなされる、ということではない。神が被造物のなかに顕現することを言い表した発言なのである。

以上のように、ヨセフとイシュマエル人の女性の発言に見られる神認識は、いずれも「汎神論的」なものではなく、自然における「神の顕現」あるいは「神の遍在」を念頭に発せられたものと考えられる。たしかに、ヨセフとイシュマエル人の女性が、ともにノアからアブラハムを経て継承された神を信仰していたことを踏まえると、両者の神認識の特徴が一致するのは、十分に理解できることである。そのうえで、さらに興味深く思われる点は、第3章において考察したように、こうした聖書的な神認識が、いわば一神教の信仰（ヨセ



フ、イシュマエル人の女性)と多神教の信仰(サイスの大神官、アセナト)の並存・融和を可能にする橋渡しの役割を担っているということである。

では、なぜそうした関係性の構築が可能になるのだろうか。それはおそらく、エジプトの多神教に見られる神認識においても、聖書的な神認識と親和性のある特徴が想定されているからではないか。つまり、エジプトの多神教の側からは、また別の特徴が聖書的な神認識との橋渡しをしていると考えられるのである。この特徴については、いくつかの影響を考慮に入れなければならないが、その一つが、先ほども言及した「ヘン・カイ・パン」という思想である。これがどういうものだったかについては、石川氏の論考を手がかりに考えてみたい。この思想と密接な関係にあった『ヘルメス選集』<sup>42</sup>を解説するくだりにおいて、氏は次のように述べている。

そしてその冊子の大部分で、随所に見られるのは、「一者」と万物の関係という根本的テーマである。「一者」は万物の始原である超越者で、それ自身は思い描くこともできぬ不明の存在だが、万物において顕現し、万物に内在する。「一者」はそれのみにより存在する唯一絶対の存在でありながら、個々の一切の存在において顕現することにより、一即一切、一即多であり、内在的超越的である<sup>43</sup>。

ここで述べられているように、一者と万物という根本テーマの考え方こそが「ヘン・カイ・パン」の思想であった<sup>44</sup>。この思想は、唯一神と多神教の神々の並存を可能にするだけではない。目には見えない「一者」が「万物に顕現」し「万物に内在する」ということから、ヨセフやイシュマエル人の女性が語った聖書的な神認識と極めて近い関係にあるように見える。「ヘン・カイ・パン」の思想は、汎神論の一種としてカテゴライズされるが、そういう意味では、たしかにユング版『アセナト』における宗教観も「汎神論的な」思想からの影響を考慮して考える必要があるように思われる。その場合の焦点は、ユングがどのようにしてこの思想に接することができたのかということである。

エジプト学研究的ヤン・アスマンによれば、「ヘン・カイ・パン (Hen kai pan : 一即一切、一即多)」の思想が、古代エジプトに由来することを示したのは、17世紀のラルフ・カドワース (1617-1688) であった<sup>45</sup>。カドワース<sup>46</sup>は、著書『宇宙の真の知的体系』The True Intellectual System of the Universe (1678)において『ヘルメス選集』を偽書とする説を退け、『ヘルメス選集』の復権を果たすとともに、そこに記された「ヘン・カイ・パン」の思想が、古代エジプト神学の要諦であることを確認した<sup>47</sup>。ドイツにおいても読まれていたこの著作は、18世紀後半の「エジプト熱」<sup>48</sup>に少なからず影響を及ぼすことになった。もっとも、ユングがカドワースの著作を読んでいたかどうかの確証はない。しかし、ユングとヘルメス主義との間にはきわめて深い関係があった。というのも、ヘルメス主義には実に様々な思想・哲学が含まれるが、ユングはラディカル敬虔主義者やその他の神秘思想家の著作などを通じて、こうした思想に通じていたからである。

例えば、とりわけ自然哲学や神智学に強い関心を寄せていたユングは、1787年にその研究成果を匿名で出版している。その著作とは、ダールベルク<sup>49</sup>、ヘルダー、カントに捧げられた『自然知の秘密へのまなざし』*Blicke in die Geheimnisse der Natur-Weisheit* のことである。この本の構想は、1771年、すなわち『アセナト』を発表する2年前、彼がまだシュトラスブルク大学に在学していた頃に始まり、1776年にいったん総括されたものが『神の本質と万物の根源についての神智学的考察』*Der theosophische Versuch vom Wesen Gottes und von dem Ursprung aller Dinge* のタイトルで清書されていた。研究者のハーンは、これらの著作にヘルメス主義からの影響が色濃く認められることを明らかにしている<sup>50</sup>。

また、ユングの自伝的著作には、ヘルメス主義と深くかかわる錬金術において重要な役割を担った「賢者の石」の話題が、たびたび登場している。それは、若い頃のユング自身が錬金術に関心を寄せていたからだけでない。彼の家族や身近な人物のなかにも「賢者の石」に詳しい人物がいたからである。例えば、ユングの母方の祖父で、牧師職を追放された人物は、生涯を通じてその魅力にとらわれた分離主義者だった。「賢者の石」の魅力に憑りつかれた知人もいた。ユングは、この知人から中世の錬金術師の著作を借り受けて精読していた<sup>51</sup>。

以上の事実から推察すると、ヘルメス主義とのこうしたさまざまな接点を通じて、古代エジプト神学の要諦とされた「ヘン・カイ・パン」の思想に触れる機会があったことは十分に考えられる<sup>52</sup>。とはいえ、ユングがこの思想や古代エジプト神学の信奉者だったわけではないだろう。彼の立ち位置はあくまでキリスト教にあり、『アセナト』という作品も、ノアからアブラハムを経てヨセフに継承された信仰を軸として、あくまでキリスト教的な立場から描かれたものと考えられるからである。

したがって、本稿では、ユング版『アセナト』には、ヘルメス主義的な思想に触発された神認識が息づいていると指摘するととどめておき、ユングと「汎神論的な」神認識あるいはヘルメス主義との関係については、機会を改めて検討することにしたい。

## おわりに

ユング版『アセナト』における信仰をめぐる対話には、すべての宗教の根底に根源的な共通の神が存在すること、すなわち、その表れ方は宗教に応じてさまざまに異なるが、元をたどれば一つであるという認識が表れていた。ヨセフやアセナトらの信じる神ないしは信仰が反発しあうことなく、最終的に共存・融和する道筋が示されていたことを踏まえるならば、この話はいわば、宗教あるいは宗派の相違を超えた共生の可能性を示唆した物語として、そしてその意味では、後に書かれるレッシングの『賢者ナータン』における宗教寛容の理念に通じる物語として読むこともできるだろう。ユング版『アセナト』において、そうした宗教寛容的な姿勢は、自らの神を捨てることなく、ヨセフの神をも受け入れたア

セナトの信仰姿勢に最もよく表れていた。旧約聖書偽典の『アセナト』がアセナトの改宗を強調するユダヤ教の宣教文学であったのに対し、宗教の別を強調せず、特定の宗教・宗派に特化しない『アセナト』が新たに登場したことは、18世紀後半のドイツならびにヨーロッパにおいて大きなメッセージを放つものだったと言えるだろう<sup>53</sup>。

ただし、ユングが生きた18世紀後半というのは、啓蒙主義の洗礼を受けるなかで、伝統的なキリスト教が大きく揺さぶりを受けた時代だった。キリスト教とそれ以外の諸宗教との融和という問題に取り組む以前に、キリスト教そのものが根底から掘り崩されつつあったのである。そうした時代状況のなか、ユング自身も、少なくとも1780年代後半に至るまでは、自らの信仰のあり方に迷い、悩み続けていた。1770年代前半のシュトラースブルクでの学生時代に、自らの素朴な啓示信仰が周囲の人々の批判に晒され、戸惑いを隠せずいたユングの姿を、ゲーテは『詩と真実』に書き留めている<sup>54</sup>。無神論、理神論、宗教懐疑をめぐる問題に直面したのもこの時期であった。同時代のさまざまな現実を突きつけられたユング自身は、「躓いては書物を読み、考え、そしてまた書物に向かった」<sup>55</sup>と記している。

『アセナト』が大学を出て間もない頃に執筆された作品であることを考えると、この作品に描かれた融和的な神認識というのは、信仰のあり方に悩んでいたユングが、読書等を通じてさまざまな思想に触れつつ、試行錯誤するなかで辿り着いた一つの信仰の形だったと言える。ただしそれは、きわめて素朴で理想主義的なものであり、キリスト教が抱えていた現実的な諸問題に対して即効性のある処方箋を示すものではなかったと言わざるを得ない。また、ユング自身が抱えていた信仰上の迷いがすべて解消されたわけでもなかった。しかしながら、若きユングがこの作品に描いた信仰のあり方は、宗派の別よりも信仰心の有無とその内実を重んじる姿勢として、その後の作品ならびに宗教活動に息づいている。処女作には、作家の本質が原石のような形で表れることがしばしばあるが、そういう意味では、この『アセナト』にも、ユング本来の宗教性ないしは宗教観が端的に表れていたと見ることもできるかもしれない。

## テキスト

Jung-Stilling, Johann Heinrich: Ase=Neitha. Eine orientalische Erzählung. In: Der Teutsche Merkur. 3. Bd. 1773, S. 220-237.; Beschluß der Ase=Neitha. In: Der Teutsche Merkur. 4. Bd. 1773, S. 119-134. 本文での引用に際しては、タイトルをANと略記し、横に巻号とページ番号を添えた。

---

本稿は、大阪公立大学ドイツ文学会第71回研究発表会（大阪公立大学杉本キャンパス、2024年3月30日）での口頭発表「ユング＝シュティリングの『アーゼ＝ナイタ』について」に加筆修正を施したものである。

<sup>1</sup> 編集者に宛てた投書の形になっている。投稿者の名前として「W. S. J.」のイニシャルしか記されていない。

- ないが、作品の執筆を促したヤコービ兄弟によるものとされている。おそらく兄のヨーハン・ゲオルク・ヤコービ (1740-1814) ではなく、当時はまだ仲の良かったその弟フリードリヒ・ハインリヒ・ヤコービ (1743-1819) によるものと考えられる。Vgl. Jung-Stilling, Johann Heinrich: Ase=Neitha. Eine Orientalische Erzählung. In: Der Teutsche Merkur. 3. Bd. 1773, S. 220-222.
- <sup>2</sup> ユングが晩年に執筆した聖書物語のなかでは「Ase-Neitha」あるいは「Aßnath」と綴られている。Vgl. Jung-Stilling, Johann Heinrich: Des christlichen Menschenfreunds biblische Erzählungen. Erzählunegn. Johann Heinrich Jung genannt Stilling. Sämtliche Schriften. Band 7. Hildesheim[u.a.] 1979, S. 186.
- <sup>3</sup> この上着は、ヨセフが他の兄弟とは異なり特別扱いされていたことを示すものである。ヨセフが奴隷として連れ去られた後、兄弟たちはこの着物を雄山羊の血に浸し、父ヤコブに送り届ける。この着物を目にしたヤコブは、ヨセフが野獣に食い殺されたと判断する。訳は新共同訳 (『聖書 新共同訳 旧約聖書続編つき』日本聖書協会、2009年) による。
- <sup>4</sup> 『ヨセフとその兄弟』Joseph und seine Brüder は、トーマス・マンが1926年から1943年にかけて執筆した4部作の長篇小説。第1部『ヤコブ物語』Die Geschichten Jaakobs (1933)、第2部『若いヨセフ』Der junge Joseph (1934)、第3部『エジプトのヨセフ』Joseph in Ägypten (1936)、第4部『養う人ヨセフ』Joseph, der Ernährer (1943)。アセナトは第4部に登場する。
- <sup>5</sup> アンドリュー・ロイド・ウェバー作曲によるミュージカル (原題: Joseph and the Amazing Technicolor Dreamcoat) のこと。このミュージカルにはアセナトが登場しない。『ヨセフ・アンド・ザ・アメーzing・テクニカラー・ドリームコート』[BD]ユニヴァーサル、2012年。
- <sup>6</sup> 『ヨセフ物語～夢の力～ (Joseph. King Dreams)』[BD]ドリームワークス、2019年。この映画に登場するアセナトは、エジプトの神官の娘ではなく、ヨセフを奴隷として雇った人物の家の召使いとして描かれている。
- <sup>7</sup> 全6巻 (第1巻: 1777年、第2巻: 1778年、第3巻: 1778年、第4巻: 1779年、第5巻: 1804年、第6巻: 1817年) を一冊にまとめた全集版は、1835年に出版された。本稿では以下のリプリント版を用いた。なお、引用に際してはLGと略記し、横にページ数を添えた。Vgl. Jung-Stilling, Johann Heinrich: J. H. Jungs Lebensgeschichte. Johann Heinrich Jung genannt Stilling. Sämtliche Schriften. Band 1. Hildesheim [u.a.] 1979.
- <sup>8</sup> Dedert, Hartmut: Die Erzählung im Sturm und Drang. Stuttgart 1990, S. 18.
- <sup>9</sup> Goethe, Johann Wolfgang: Aus meinem Leben. Dichtung und Wahrheit. Hrsg. von Klaus-Detlef Müller. Frankfurt am Main 1986, S. 155f. 訳は以下のものを用いた。ゲーテ『詩と真実 第1部』山崎章甫訳、岩波書店、2000年、236-238頁。
- <sup>10</sup> ドイツ語の作品タイトルを発表順に記すと以下になる。Vgl. „Der Tod Adams, ein Trauerspiel“ (1757), „Salomo, ein Trauerspiel“ (1764), „David, ein Trauerspiel“ (1772).
- <sup>11</sup> 例えばユングの自伝小説の第3巻には、彼が住み込みで家庭教師とその家の商売の手伝いをしていた頃、クロップシュトックの『救世主』を読み、感銘を受けた様子が記されている。Vgl. LG241.
- <sup>12</sup> Vgl. LG277.
- <sup>13</sup> Vgl. Kenichi HASEGAWA: Jung-Stilling und seine Volkslieder, In: Seminarium 39, 2017, S. 21-44.
- <sup>14</sup> ゲーテとユングの関係を考察したものとしては、例えば以下を参照。Vgl. Schwinge, Gerhart: Prophet und Weltkind - Jung-Stilling und Goethe(1990). In: Schwinge, Gerhart: Johann Heinrich Jung-Stilling(1740-1817), „Patriarch der Erweckung“. Heidelberg[u.a.] 2014, S. 51-75.; Benrath, Gustav Adolf: Die Freundschaft zwischen Goethe und Jung-Stilling. In: Kemper, Hans-Georg und Schneider, Hans (Hg.): Goethe und der Pietismus. Tübingen 2001, S. 157-170.
- <sup>15</sup> Vgl. LG277.
- <sup>16</sup> 創世記の第39章から第45章までの主要な出来事を題材としたオラトリオ『ヨセフとその兄弟たち』は、ヨセフが牢獄にいる場面から始まる。ヨセフが牢獄にいるのは、先述の通り、雇い主の奥方を誘惑したという濡れ衣を着せられて、投獄されたからである。高際氏は本作品について、同時代のイギリスで起きた「パメラ論争」においてフィールディングが『ジョウゼフ・アンドルーズ』を執筆した経緯も踏まえつつ、興味深い考察を行っている。高際澄雄「ヘンデル『ヨセフとその兄弟たち』における詩と音楽」、『宇都宮大学国際学部研究論集』第26号、2008年、105-116頁、および、高際澄雄「パメラ論争におけるヘンデルの『セメレ』と『ヨセフとその兄弟たち』」、『宇都宮大学国際学部研究論集』第41号、2016年、111-123頁を参照。
- <sup>17</sup> ただし、ヘンデルの『ヨセフとその兄弟たち』の台本では、アセナトが物語の展開に重要な役割を担い、ヨセフとアセナトの夫婦愛が兄弟たちの嫉妬と対比され、それを乗り越えるものとして提示されていると高際氏は指摘している (高際澄雄「ヘンデル『ヨセフとその兄弟たち』における詩と音楽」、114頁を参照)。
- <sup>18</sup> 訳は新共同訳 (『聖書 新共同訳 旧約聖書続編つき』日本聖書協会、2009年) による。

- <sup>19</sup> このアンソロジーには、ほかにヤコービ兄弟の兄ヨーハンの二作品„Charmides und Theone oder die sittliche Grazie“(1773), „Elysium: Ein Vorspiel mit Arien“(1770)が所収されている。ただし、書名にはヤコービの名前しか挙がっていないため、『アセナト』の作者がユングであることは分からない。Vgl. Jacobi, Johann Georg: Sentimental Love. Illustrated in Charmides and Theone, and Ase-Neitha, two ancient tails, to which is added, Elysium, a prelude, the whole translated from the german. London 1789.
- <sup>20</sup> ロッシーニ、ステファヌ/シュマン=アンテルム、リュト『図説エジプトの神々事典』矢島文夫・吉田春美訳、河出書房新社、1997年、60-62頁を参照。
- <sup>21</sup> ここでいう「プタス神」とは、メンフィスの古い地域神で、手工業が盛んな場所で崇拜されたという造物神「プタハ」を指していると考えられる。同上、146-147頁を参照。
- <sup>22</sup> Vgl. Haug, Johann Friedrich: Die Heilige Schrift Altes und Neues Testaments. Erster Theil in sich haltend das Gesetz oder die Fünff Bücher Moseh. Berlenburg 1726.
- <sup>23</sup> Vgl. Guion, Madame Jeane Marie Bouviere de la Mothe: Das Alte Testament mit Erklärungen, das Innere Leben betreffend. 1. [Die Bücher Genesis und Exodus. Oder das I. und II. Buch Mosis mit Erklärungen, das Innere Leben betreffend]. Berlenburg 1744.
- <sup>24</sup> Vgl., Haug: a.a.O., S. 241. u. Guion: ebd., S. 323.
- <sup>25</sup> 邦訳版の注によれば、タイトルはさまざまなのが伝えられており、『ヨセフとアセナテ』という題はどの写本にも存在しない。ただし、大多数のギリシア・ラテン=ロマン文学と同じく、二人の主人公の名で題することが最もふさわしいという。そのため、本論でも最初に『ヨセフとアセナテ』と表記した。また、それ以外の箇所では、ユング版と比較する際の便宜上、偽典『アセナト』と表記した。「アセナテ」も「アセナト」に統一した。日本聖書学研究所編『聖書外典偽典別巻補遺I』教文館、1979年、563頁を参照。
- <sup>26</sup> 同上、269頁を参照。
- <sup>27</sup> 各写本の研究については、以下を参照。Vgl. Burchard, Christoph: Gesammelte Studien zu Joseph und Aseneth. Leiden/New York/Köln 1996. ; Ders.: Untersuchungen zu Joseph und Aseneth : Überlieferung-Ortsbestimmung. Tübingen 1965.
- <sup>28</sup> シリア語版のタイトルは『アセナトについて』となっており、ユング版『アセナト』と同様に「アセナト」に焦点をあてたタイトルになっている。なお、シリア語版からの翻訳は、以下に所収されている。ヤコボビッチ、シンハ/ウィルソン、バリー『失われた福音』翻訳監修：守屋彰夫、桜の花出版、2016年、531-646頁。
- <sup>29</sup> 日本聖書学研究所編『聖書外典偽典別巻補遺I』、259頁を参照。
- <sup>30</sup> 同上、273-311頁。
- <sup>31</sup> 同上、291頁。
- <sup>32</sup> 三つ目の相違点については、聖書との比較を交える必要があるため、注で触れておきたい。偽典版『アセナト』では、天使が夢ではなく、実際にアセナトのもとに現れるため、「夢解き」をする場面がない。これに対してユング版『アセナト』では、アセナトが見た夢が描かれる。その夢では、顔をベールで覆った乙女（アトール神）が現れる。雲間から現れたその乙女はヨセフに似た若者を連れていたが、若者は、奴隷の服装ではなく、王のように素晴らしい服装をしていた。乙女はその若者をアセナトの方へ導き、若者はアセナトの手を取って雲のなかへ連れて行く。旧約聖書のヨセフであれば、この夢の意味を解いてみせるはずだが、ユング版『アセナト』のヨセフは夢解きをしない。アセナト自らが夢解きをするのである。ヨセフから天使という存在を教えられたアセナトは、自らの夢解きが正しいことを確信する。それは自分が将来この若者と結婚するという確信である。アセナトの見た夢は、いわゆる神のお告げあるいは神の摂理が示されたものであり、それは作者のユングが重視していた神の「先慮」(Vorsehung) と言い換えることができる。このように、ヨセフ物語において重要な役割を担う「夢」と「夢解き」、そこに表れる「神の摂理」が、ユングの『アセナト』の場合は、ヨセフではなく、アセナトとの関係において描かれていることから、本作品が「アセナト」に焦点をあてていることが分かる。
- <sup>33</sup> 日本聖書学研究所編『聖書外典偽典別巻補遺I』、278頁。
- <sup>34</sup> 関谷定夫監訳『旧約聖書人名事典』東洋書林、1996年、11頁を参照。サイスの地域神であった女神ネイトの性格はさまざまであるが、好戦的な面も持っていたことから、戦争や狩猟の神とされていた（ロッシーニ、ステファヌ/シュマン=アンテルム、前掲書、125-126頁、ウィルキンソン、H・リチャード『古代エジプト大百科』内田杉彦訳、2004年、156-159頁、ルルカー、マンフレート『エジプト神話シンボル事典』山下圭一郎訳、大修館書店、1996年、94頁を参照）。なお、ユングは、後年に執筆した聖書物語のなかで、女神ネイトは、ローマ神話のミネルヴァおよびギリシア神話のパラスであると説明している。つまり、女神アテナと同一視していた（Vgl. Jung-Stilling: Des christlichen Menschenfreunds biblische Erzählungen, S. 186.）。ローマの歴史家プルタルコス『モラリア』（「イシスとオ

- シリシについて)において女神アテナと同一視されていたのは、エジプトの女神イシスであったが(プルタルコス『モラリア 5』(西洋古典叢書)丸橋裕訳、京都大学学術出版会、2009年、16頁)、プラトンの『ティマイオス』においては、エジプトの女神ネイトであった(種山恭子ほか訳『プラトン全集 12 テイマイオス クリティアス』岩波書店、1975年、15-16頁)。したがってユングは、プラトンの理解に拠っていたと推察される。
- <sup>35</sup> 『聖書外典偽典別巻補遺 I』、286頁。
- <sup>36</sup> 同上、265頁を参照。
- <sup>37</sup> チュザス(Chusas)の町は、実際ハトホル(アトール)崇拜の中心として知られる。
- <sup>38</sup> ユング版『アセナト』の15年以上も後のことになるが、例えばシラーも、エッセイ『モーセの使命』(1790)のなかで、同様の認識を示していた。Vgl. Friedrich von Schiller: Die Sendung Moses. In: Karl-Heinz Hahn (Hg.): Schillers Werke. Nationalausgabe. Bd. 17. Historische Schriften Erster Teil. Weimar 1970, S. 377-397 (hier vor allem S. 390f.).
- <sup>39</sup> プルタルコス、前掲書、36頁を参照。
- <sup>40</sup> 18世紀後半のドイツでは「神即自然」の標語で知られるスピノザの思想をめぐる論争に端を発した、いわゆる「汎神論論争」が起こるが、この論争が本格化するのは、1780年代以降である。『アセナト』は、それより前の1773年に書かれた。また、ユング自身は、スピノザの汎神論を無神論と同等のものとして理解し、拒絶していた。それゆえここではスピノザ的な汎神論から切り離して考察している。「汎神論論争」の経緯については、以下の研究を参照。安酸敏真「第5章 レッシングとスピノザ」、加藤泰史編『スピノザと近代ドイツ 思想史の虚軸』岩波書店、2022年、97-119頁。
- <sup>41</sup> LG226.
- <sup>42</sup> 『ヘルメス選書(コルプス・ヘルメティクム)』とは「三重に偉大なヘルメス=ヘルメス・トリスメギストス」が書いたとされる文書群『ヘルメス文書』(早いもので紀元前1世紀頃、遅いもので4世紀頃に成立)のうち、宗教・哲学的な内容を持つ文書群のことを指す。池上英洋『錬金術の歴史』創元社、2023年、49-51頁を参照。
- <sup>43</sup> 石川實「エジプト的空間の復活」(「プロジェクト共同研究組織」生きられた空間—文学と社会における「近代」—)、『産研叢書 24』、大阪産業大学産業研究所、2004年、5頁。
- <sup>44</sup> 『ヘルメス選書』においては、例えば以下のような一節がある。「ところで、『一なる者』は万物の始原であり、根であるから、根や始原のように万物の内にある。(…) こうして『一なる者』は始原であるから、すべての数を包みながら、何によっても包まれることがなく、すべての数を生み出しながら、他のいかなる数によっても生み出されることがない」(132頁)、「以上のものを通じて、神は万物を自分自身に属するものとして造るのです。そこで万物は神の部分であり、万物が(神の)部分であるなら、神は万物であることとなります。」(418頁)。『ヘルメス文書』荒井猷・柴田有訳、朝日出版社、1980年を参照。
- <sup>45</sup> アスマン、ヤン『エジプト人モーセーある記憶痕跡の解読』安川晴基訳、藤原書店、2017年、249頁。
- <sup>46</sup> ケンブリッジ・プラトン学派の思想家。
- <sup>47</sup> アスマン、前掲書、249頁、および、石川、前掲論文、23-24頁を参照。
- <sup>48</sup> 石川、前掲論文、6頁以降を参照。石川氏は、「エジプト熱」とでも言うべき状況を呈した時代としてルネサンスと啓蒙主義の時代を挙げて詳細に論じている。
- <sup>49</sup> カール・テオドーア・フォン・ダールベルク(Karl Theodor von Dalberg 1744-1817)。ユングは、ダールベルクの著作『宇宙についての諸考察』Betrachtungen über das Universum (1777)に関心を寄せていた。ダールベルクはカトリック教会の要職に加えて、一時期、神聖ローマ帝国の宰相も務めた。また、レーゲンスブルク大司教の座を長きに亘って務めた。
- <sup>50</sup> Vgl. Hahn, Otto W.: Jung-Stilling zwischen Pietismus und Aufklärung. Sein Leben und sein literarisches Werk 1778 bis 1787. Frankfurt a.M.[u.a.] 1988. S. 424-426. なお、ハーンは、自然哲学の面でユングに影響を与えたと考えられる重要人物として、とくにパラケルスス、バエメ、スウェーデンボルグの名前を挙げている。
- <sup>51</sup> Vgl. LG157.
- <sup>52</sup> 当時は、ヘルメス主義への関心と連動する形で古代エジプトの宗教への関心が、とりわけ知識人の間において高まっていた。Vgl. Hahn: a.a.O., S. 421f.
- <sup>53</sup> 自伝小説には『アセナト』の評判がよかったと記されている。Vgl. LG310.
- <sup>54</sup> Vgl. Goethe: Dichtung und Wahrheit, S. 403-405.
- <sup>55</sup> Jung-Stilling, Johann Heinrich: Schatzkästlein, Gedichte und Taschen-Unterhaltungen. Ergänzungsband zu den sämtlichen Schriften. Johann Heinrich Jung genannt Stilling. Sämtliche Schriften. Band 8. Hildesheim [u.a.] 1979, S. 876f.